

コメニウスの『大教授学』における庭園の喩え

—『教授学著作全集』の扉絵解釈試論—

A Study on the Metaphor of Garden in Comenius's *Didactia Magna*:

How can we interpret the frontispiece of *Opera Didactica Omnia*

北詰 裕子

Yuko KITAZUME

はじめに

本論が試みるのは、コメニウスの『大教授学』における「庭園」の喩えの分析である¹。

コメニウスの思想におけるアナロジーについては、すでにヤン・パトチカがその重要性を論じているが²、本論は特にコメニウスが『大教授学』のなかで繰り返し言及する「庭園」という喩えについて考察するものである。「庭園」は「楽園」「園丁」「樹木」「若木」「接ぎ木」「種子」といった一連の喩えとともに、教育や学校のありかたを例示するものとして提起される。

コメニウスの教育思想における比喩や「庭園」の喩えの分析については、幾つかの先行研究が存在する。

船越美穂は、比喩表現という観点からコメニウスとフレーベルを比較し、コメニウスの『大教授学』における比喩の特徴を、印刷技術を教授方法へ適用した教刷術に代表されるように、「メカニズム的色彩が濃い」³ことにその特徴をみている。また、フレーベルの「庭園」に彼の「植物類推的比喩表現」が集約されていると指摘し、フレーベルにおいては自然と人為の矛盾が自覚されていることに対して、コメニウスの比喩表現は自然と人為の区別が明確でないことを指摘している⁴。船越の論点は比喩を一つのレトリックと捉えた上で、両者の比喩表現の特徴を論じ、「いかに彼らが、彼らの画期的な教育の知のあり方を発見的・創造的に認識しえたのか」⁵を明らかにすることを目的としている点で興味深いものである。

¹ 本論は教育哲学会第59回大会のラウンドテーブル「例示／例外の政治学」での報告原稿を加筆修正したものである。なお、当日のコメニウスの扉絵解釈をめぐる議論については、『教育哲学研究』第115号、2017年、pp.126-128参照。

² ヤン・パトチカ『ヤン・パトチカのコメニウス研究 世界を教育の相のもとに』相馬伸一編訳、宮坂和男・矢田部順二共訳、九州大学出版会、2014参照。

³ 船越美穂「教育をとらえる比喩モデル研究」『教育方法学研究』第17巻、1991年、p.2.

⁴ 船越前掲論文、pp.3-6.

⁵ 船越前掲論文、p.1.

対して本論が試みるのは、そこで比喩とみなされる表現（「庭園」）がなぜ比喩として機能しうるのかを、複数の喩えの参照系を辿りながらテキスト内在的に考察することである。そこでは喩えが複層的に幾つかの文脈において適用される様子が見て取れよう。このことは、むしろ矢野智司によるフレーベル論におけるメタファー分析に近い。船越による比喩表現研究がコメニウスとフレーベルの違いを見出す一方で、矢野によるフレーベルのメタファー論は、むしろ新プラトン主義的な世界観や、ミクロコスモスとマクロコスモス、それらと象徴の関係への言及しており、コメニウスとの近さも読み取れる。

矢野智司は、フレーベルの教育論を論じる中で子ども＝植物のメタファーについて論及している。矢野は植物のメタファーを、①フレーベルの自然観にもとづくもの、②合自然の原理、消極教育の原理を示すもの、③人類の新しい芽としての子どものというアナロジーという3つの用法に区別した上で、フレーベルにおける「庭園」を庭園、エデンの園、家庭・子どもの庭、子どもたちの庭という複層にわたって、子ども＝植物のメタファーについて論じている⁶。

矢野の考察をふまえて、本論が試みるのは、コメニウスが喩えを使うときの参照の宛先と参照のしかたである。

近代教育学の古典的テキストとして位置づけられてきた『大教授学』は、きわめて多くの喩えや例示（「例えば～であるように」、「～と同じように」、「～であるように、そのように」）に依拠しながら教育や学校のあり方が語られるテキストである。印刷術の例とそれを模した教刷術 didacographia は有名であるが、その他にも、教育や学校をある技術arsと捉え表現するときにコメニウスが、参照すべきたとえとなる技術としてたびたび言及するものに、庭園、建築、印刷、航海、時計、彫刻や画家の諸技術がある。

まさに、こうした諸技術に囲まれたただ中に教室風景が描き出されている一枚の絵が存在する。それは、1657年にアムステルダムで出版されたコメニウスの『教授学著作全集』（*Opera Didactica Omnia*、以降『全集』と略記）の、『大教授学』が含まれた第一巻に付された扉絵である⁷。

この扉絵は、読者の方を向いたコメニウスが左手を向けて誘う開かれた扉の奥に、当時の学校の

⁶ 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部、1995年、pp.113-123。

⁷ 『全集』は全4巻の著作であり、第1巻から第3巻まではコメニウスがアムステルダムに入る以前に著してきた教育に関する諸作品（彼の主著の一つとされる『大教授学』*Didactica Magna*や、言語教科書として名高い『開かれた言語の扉』、『開かれた言語の前庭』をはじめ、『幼児学校』、『ラテン語学習についての教授学論考』、ハンガリーの汎知学校設立に関する諸著作や『遊戯学校』、また『汎知学の前座』、『最新言語教授法』等）が含まれ、第4巻はアムステルダムに入って以降の諸著作と、『全集』を編集するにあたって自著紹介を記した『知恵の箕』などが含まれている。チャブコヴァは取められた諸著作の時期について明らかにしている。「コメニウスは三巻におさめる諸作品を、彼がヨーロッパの三つの国において学校改革に従事した三つの時期から選び出した。選ばれた諸作品は以下の時期に分けられてきた。1. レシュノの最初の滞在からイングランド出発までの1630年～1641年。2. スウェーデンの学校改革の仕事をし、エルビングに滞在した1642年～1648年、そして、彼の諸作品の幾つかが出版されたレシュノでの二度目の滞在であった1648年～1650年、3. ハンガリーのサロシュ・パタクでの滞在1650年～1654年。4. 『全集』の第4巻には、1656年～1657年にアムステルダムで書いた諸作品が加えられた。」Dagmar Čapková, *Opera didactica omnia J.A. Komenského*, Pedagogické museum J.A. Komenského v Praze, Praha-Přerov listopad, 2007, p.19. なお、『全集』の各巻の巻頭にはタイトルの下にコメニウスが用いるエンブレム *Omnia sponte fluant, absit violentia rebus*（すべてのことはおのずと流れ出す、ものごとに暴力のなからんことを）が配されている。このエンブレムについては相馬伸一「コメニウス教育思想の再読可能性」『近代教育フォーラム』第20号、2011年、pp.101-115参照。



図1 コメニウス『教授学著作全集』扉絵

教室風景が見え、その周囲をぐるりと額縁に嵌め込まれた図絵が囲む構図になっており、この扉絵そのものがコメニウスにとっての教育をめぐる一つの喩え（あるいは寓意）となっているようにみえる。

コメニウス研究家のD.チャプコヴァによれば、この扉絵は、オランダの芸術家クリスパン・デ・パッセ (Crispyn de Pas) によって銅板に彫刻されたものである。チャプコヴァは、小さな図絵たちは、コメニウスが、良い、迅速、かつ容易な学校仕事の進展を示したように、学校のアレゴリー—時計の、航海の、庭園の、工房や印刷仕事の、建築術のごとくに—を表現している、と紹介する⁸。本論がさらに問いたいのは、コメニウスにおいて、なぜそのような諸技術が喩えやメタファーとして教育を表象しうるのか、という点である。そのため、『教授学著作全集』のなかの『大教授学』の分析を通して、扉絵に描かれた図絵の各部分がどのような意味において教育を喩えるものとして示されているのか、また、コメニウスにおいてどのような論理においてそうした喩えそのものが有効性をもつものとして認識され、使用されているのかを考察したい。

本論では、まず第一に、この扉絵に描かれた諸技術が『大教授学』のなかでどのようなメタファーや例として教育や学校のあり方と結びつけられているのか概観する。第二に、扉絵に描かれた諸技術の中から、「庭園」に的を絞って、メタファーの重層性を論じる。第三に、コメニウスにおいてどのような論理においてそうしたメタファーや例そのものが有効性あるものとして認識され、使用されているのかを『全集』の自著紹介「知恵の箕」から考察する。

なお、扉絵の解釈については、美術史やエンブレム研究との関連を視野に入れるべきであるが、今回は、コメニウスのテキストのなかで、それぞれのメタファーや喩えがどのような連関において配され、結合されているのかに焦点化して論じる。

1. 扉絵に描かれているもの

(1) 扉絵の概略

まずはじめに、扉絵に書かれているものを概観する（図1参照）。

- 1) 天上画： 下の半円 雲と星（右に5つ、左に6つ） 天上の3本の梁 右の梁 双子座、月、蟹座、3つの星、真ん中の梁の右側獅子座、乙女座、左側天秤座、太陽、蠍座
- 2) 中央上： 横長の図絵 向かい合う二つの岸辺 左は岩山、針葉樹、鳥、右は草、広葉樹 空には三羽の鳥、川の先の海には3隻の船
- 3) 中央： 開かれた扉、教壇、教師、聴衆（学生？） まどからの光で教壇の上は少し明るい
- 4) 右上： 庭園を手入れする園丁、手前の野原を耕す人、森の奥の畑を耕す人
- 5) 右中央： 印刷所と印刷工、天上に吊られた12枚の紙
- 6) 右下： 大工、左官、建築関係
- 7) 左上： 時計（日時計？）

⁸ Čapková, pp.62-63.

- 8) 左下： 彫像を彫る人、壊れた彫像をはかる人？肖像を描く人
- 9) コメニウス： 左側に座り、こちらを向いている 左手は開かれた扉の方に上向きに差し出されている。右手は、机の上に広げられた書物に羽ペンで書いている最中。机の上には、インク壺、地球儀、2冊の本。机の右側の奥に四角いスツール。コメニウスより手前の格子柄の床の上にコメニウスが書いている本と同じ大きさの本一冊、足下に、机の上の本と同じ大きさの本一冊。

(2) 『大教授学』との対応

以上の扉絵は、コメニウスが語る教育について描いたものであると考えられる。扉絵に対応する記述を『大教授学』から示せば、概略的には以下ようになる。

1) 天空

天空は、混乱のない時間の流れを例示する。神は太陽と月と星とをそなえた天を広げ、これらの円形の回転によって、時と日と月と年とが測られるように定めたように⁹、学校の秩序もまた年月日を区切り混乱無く流れるようにするべきだという例。なお、この時間は、一挙に生み出された天使とは異なり、継続する増殖を運命づけられた人間のために与えられたものである。

2) 航海

船や航海について語られるのは、コメニウスが『大教授学』で提案する教育の改善が、新しく画期的であることを強調する文脈である。新しい発明に対する人間の反応を、アルキメデスが機械で巨大船を浮かばせた例 *exemplo*、そして、コロンブスによる航海と新世界の発見の例をもちいて、実際見るまでは信じられないが、見てみると今までみつからなかったことが不思議に思われることとして例証する。

7) 時計

時計は大きく分けて二つの文脈で例示される。一つは、時計内部の機械仕掛けの精密さ（比例 *proportio*）を、学校の秩序の理想として語る時、もう一つは、人間の徳行とされる釣り合いや調和を語る時である。調和という観点からは、時計の歯車の仕掛けは世界（宇宙の秩序）を示すと同時に、人間の肉体内部や魂をも示す。

天空の動きを模す時計は、技術は自然を模倣するのだから、なにごともしえない *Artem nihilo posse nisi Naturam imitando* という、「最高の真理」¹⁰を体現する。

⁹ コメニウス『大教授学』鈴木秀勇訳、明治図書、1969、p.58、J. A. Comenius, *Didactica magna, Opera Didactica Omnia, pars I*, Amsterdam 1657, 同書の写真復刻版 Praha, 1957, p.21. なお、本論の『大教授学』の引用については、訳語の検討が必要と目される特段の箇所をのぞいては、概ね鈴木訳にしたがった。

¹⁰ 『大教授学』 p.137, *Didactica magna* p.63.

5) 印刷

学校での教育の手順と秩序の例示として多用される。特に『大教授学』第32章（学校全般の秩序について）は、一章分すべてが、印刷術の手順を例に、教える技術について例証される。

知識が、外面的に紙に刷り込まれるのとほぼ同じ方法で、子どもたちの精神にも書き込まれることが明らかになって参ります。この理由からすれば、印刷術Typographia の名前をもじって、この新しい教授学に教刷術didacographia という名前を考えても必ずしも不適當ではありませんまい¹¹。

また印刷術は同時に、人間の精神は白紙であることなどの例示としても用いられる。

4) 庭園（植木職人）、6) 建築技術、8) 工房（彫刻・画家）

庭園、工房、建築にかかわる諸技術は、特に自然に基づき、それと平行関係にある諸技術として多く言及される。

雛をかえす鳥を自然の例（基礎）として挙げ、それを模倣して成果をあげている例として、植木職人、画工、建築職人の技術を示し、それをさらに教育や学校のあり方はまねるべき、という語り方が多用される。

同時に、彫刻の素材としての大理石＝青少年＝切り出されるものや、植木＝青少年＝手入れされるもの、という意味等々も重ねられる。

2. 「庭園」の喩え

以上、扉の各図絵の概略を『大教授学』の叙述から概観した。しかしながら、上記の解釈はあくまでも、それぞれに描かれた技術arsの輪郭の素描にすぎない。ひとつひとつの図絵は、テキストのなかに複数の文脈をもつことで、教育についての説得力を持ち得る喩えとなっているようにみえる。次は、喩えの重層性について、「庭園」に関わる部分に的を絞って考察を試みる。

コメニウスが教育や学校のあり方の例として「庭園」を引き合いに出すとき、「庭園」は、それに関わる複数のイメージが関連づけられることで、喩えとしての意味を与えられている。「庭園」と互に関係し合う主要なイメージとして以下では、「楽園」、「樹木」、「接ぎ木」、「種子」を取り上げる。

¹¹ 『大教授学 2』 p.136, Didactica Magna, p.186.

(1) はじまりとしての楽園一人間

「庭園」の最上のモデルは、「楽園」である。さらに「楽園」は「人間」のモデルでもある。

『大教授学』の献呈状の冒頭で、コメニウスは創世記を引きながら、神が地の塵から人間を創造し楽園においたのは、楽園を守らせ耕させるためであるばかりでなく、「人間そのものが神にとつてのよろこびの庭園hortus deliciarumとなるためであった」という¹²。

それはいかなる意味においてなのか。人間と楽園とを比較照合comparatioしてコメニウスは以下のように述べる。

申すまでもなく、楽園Paradisusが世界の最も快い場所であったのと同じように、人間は被造物の中で一番精妙なものcreaturarum delicatissima でありました。楽園は太陽の現れる方向にしたがい、人間は時間の始まりから永遠の日から現れている神の像にしたがって、つくられてありました。見る目に美しくあじわうにころよい果実の木は、ほかの場所では広く地上に散らばっておりますのに、この楽園にはそれが残らず育てられておりました。人間の中には世界のすべての素材materiaとあらゆる段階にわたる形式formaと諸形式とが、いわばひとかたまりにあつめられて、神の知恵の業すべてtotum divinae Sapientiae artificium を表しておりました。楽園には、善と悪の知識の木Arborem scientiae boni & maliがありました。人間にはどこにある・どのような善も悪もすべて見分ける精神Mentemと、それを選び分ける意志Voluntatemとがあるのです。楽園には生命の木Arbor vitaeが、人間には不死の木そのものArbor ipsa immortalitatis、申すまでもなく、神の知恵Sapientia nempe Deiがありました。神の知恵が人間の中に永遠の樹根radices aeternitatisを下ろしていたのです（シラク書 第1章 第14句）¹³。

ゆえに墮落は二つの楽園の喪失と解釈される¹⁴。楽園から地上の荒野への道のりそのまま、「かつてはいわばエデンの庭園velut hortus Edenでありました私たち〔人間〕も、今ははや、いわば荒れ果てた野velut solitude desertiに変えられてしまいました」¹⁵（括弧内筆者）。

しかしながら、とコメニウスはいう。神の恩寵による人間＝楽園の回復reparatioが歴史の中でなされてきたと語るとき、楽園として語られてきた人間は「樹木」として、語り直される。

まことに神は、天と地とすべてのものを創造した時の・その知恵を表して、見捨てた・神の楽園すなわち人類Humanum genusを今一度そのあわれみの垣根で囲んでくれました。それは、私たちの魂の・死に滅び枯れ果てた木を、神の律法という斧や、鋸、手斧で切り倒し、その樹木をはいで そこに天の楽園からとってきた・新しい接ぎ枝をついでくれるためであったので

¹² 『大教授学』 p.28, Didactica Magna, p.9

¹³ 『大教授学』 p.28-29, Didactica Magna, p.9

¹⁴ 『大教授学』 p.30, Didactica Magna, p.9

¹⁵ 同上、*ibid.*

す。そして神は、新しい根がはり、育つように、自分の血でこの木を潤し、また生きている水のせせらぎにも似た・その聖霊の・さまざまな賜ものを、この木に注ぐことをやめませんでした。神はまたこのために 幾人かの働き手を送ってくれましたが、これらの、霊の園丁 Operariosは、新しい・神の木の苗床を心から世話したのです。その証拠には 神はイザヤに、またイザヤの口をかりて他の人々に こう語りかけております。われは わが言葉をなんじの口におき わが手のかけでなんじをおおった。それゆえになんじは 天を植え 地の基をすえ、シオンに向かって、なんじは神の民である、というであろう(イザヤ書 第51章 第16句)¹⁶。

では、喪失した二つの楽園の回復とはいかなるものか。コメニウスは、楽園エデンは永遠の楽園(天国)として用意し直されたという¹⁷。もうひとつの楽園であった人間、「この回復のもっとも効果のある方法は、青少年の正しい形成によるCujus reparationis efficacissimus modus per Iuventutis informationem rectam」¹⁸。

コメニウスは、福音書の有名な言葉「幼子のわれのもとにくるのを許せ。これをとどめてはならぬ。なぜなら、天の王国はこのような者のものであるから(マルコによる福音書 第10章 第14句)」を掲げ、何より「子どもこそ本当の改革のまどであるばかりでなく、またその範例exemplarでもある」¹⁹。という。子どもの魂が大人のそれよりもわだかまりが少ないだけでなく、不信仰から遠いがゆえに、というその理由はまた「接ぎ木」によせて語られる。

(2) 接ぎ木

「接ぎ木」の最上のモデルは、キリストによる人類の、生命の木への接ぎ木である。

私たち神の楽園からきりとられた樹木にも、なお根は残っているのですし、この根さえあれば、降り注ぐ神の恩寵の慈雨と陽光を浴びて、新しい芽をふくことができるのです。事実、神はアダムの墮落つまり私たちの破滅の宣告のあとで、すぐさま改めて人間の心臓に新しい・恩寵の若枝を(祝福の種子の約束に従って)接ぎ木してinsevitくれたではありませんか。アダムとともに墮落した人々を天につれ戻すために、神の子を地上につかわしたではありませんか。²⁰

神はなぜ子どもたちをこうまでも尊び讃えるのでしょうか。[...]それはつまり、どの点からいっても子どもの魂はおとなよりもわだかまりがないものでありますし、神があわれみの心から人間の現状に涙して施してくれる治療を受けやすい、ということなのです。その理由はこうです。

¹⁶ 『大教授学』 p.30-31, Didactica Magna, p.10.

¹⁷ 『大教授学』 p.34, Didactica Magna, p.11.

¹⁸ 『大教授学』 p.36, Didactica Magna, p.11.

¹⁹ 同上, *ibid.*

²⁰ 『大教授学』 p.78-79, Didactica Magna, p.33.

アダムの墮落に始まる破滅が、私たち人類の全体を貫いているにしましても、第二のアダム・キリストSecundus Adam, Christusは、あらためて人類を、その身に、つまり生命の木に接ぎ木してくれたのですArbor vitae inest. この生命の木から引き剥がされるのは、自分の不信仰によって自分自身を引きはがす者以外ひとりもないのです（マルコによる福音書 第16章 第16句）。（ところが、このような不信仰は、子どもたちの中にはまだ見られません）²¹。

この「接ぎ木」こそ、「樹木」＝人間が墮落を脱し破滅から救済される希望の前提とされる。人間が「樹木」に例えられるとき、コメニウスが語る教育対象としての存在（子どもpuerや青少年juventus）は「種子」や「若枝」に例えられる。

私たちは信仰によってキリストに接ぎ木されているinsitiので、キリストの養子となって聖霊を与えられているのです。それにもかかわらず、私たちが種子semineである子どもたちともども、自分たちは神の王国にふさわしくないのだ、と考えるとすれば、どうしてキリストが神の王国は子どもたちだけのものである、といったのでしょうか²²。

キリスト者の子どもたちchristianorum liberos（これは古いアダムの子孫ではありません。新しいアダムの後裔です、神の子です、キリストの小さな兄弟、小さな姉妹です）の教育を願っている私たちが、この子どもたちは永遠の種子seminaを宿すにふさわしいのだ、と言っているとき、いったい誰にそんなことはあるはずがない、と言う資格があるのでしょうか。申すまでもなく、私たちは野生のオリーブに実を求めているものではありません。生命の樹に新しく接ぎ木された若枝がsurculis Arbori vitae denuo implanatis、その樹を離れずに実を結ぶように、力をかけてやるのです²³。

(3) 若木

新しく接ぎ木された若枝は、「神の若木Dei arbusculasつまり青少年」²⁴といった、樹木としての「若木」という言い方でも表現される。破滅した人類の救済策を教育に見出すとき、コメニウスはそれを庭園の創り直しとして語る。

このことから、どうしても次の結論がでてまいります。つまり、破滅した人類の救済策を立てなければならないとするならば、それは、なによりもまず 青少年の・注意深い・用意周到な教育Educationemを通じてでなくてはならない、ということであります。それはちょうど、庭園Hortumを新しく作り直したい人が、そこに新しい苗木を植え、若木がよるこんで育ってい

²¹ 『大教授学』 p.37, Didactica Magna, p.12.

²² 『大教授学』 p.79, Didactica Magna, p.33.

²³ 『大教授学』 p.80, Didactica Magna, p.33.

²⁴ 『大教授学』 p.40, Didactica Magna, p.13.

くように心を配って面倒を見なければならないのと同じことです²⁵。

しかしながら、現在では悪の実例が青少年を引きずっていくし、親も教師もうまく善を注ぎ込めない、というとき、青少年は「野生の木」として語られる。「青少年は野放しにされ、当然でもらわねばならない世話もされずに、野生の木同然になってしまうのです。誰が野生の木などに接ぎ木をしたり、水をやったり、枝を刈りこんだり、枝ぶりを直してやったりするでしょう」²⁶。

間違った教育を受けた人間を正しく引き戻すより難しいことは一つもない、ということになります。申すまでもなく、若木の時に上に高く育ったか、横に低く伸びたか、こずえが素直に広がったか、曲がりくねったか、それがそのまま成木の姿です。成木になってからでは、もう変えることはできません。²⁷

(4) 人間—樹木

人間と樹木を類似similisとして語ること—接ぎ木や若木を経由しながら—は、野育ち=放任、庭園=教育という喩えを成り立たせる。

上述のところから、人間の境遇も樹木のそれと同じであるHominis & Arboris similem esse conditionem、ことが明らかになります。申すまでもなく、実のなる木Arbor fructifera (リンゴ、なし、イチジク、ブドウ)は、なるほど、放っておいても自分の力で成長していけますが、しかし、それではまだ野育ちagrestisですし、野育ちの実しかつけません。やわらかな・甘味のしたたる実を結ぶには、熟練した植木職人perito Arboratoreによって植えられ、水をもらい、枝を刈りこんでもらわねばなりません。同様に、人間は、確かに、放っておいても人のかたちfiguramになることはなりますが(獣がそれ相応の形になるのと同じことです)、しかし、あらかじめ知恵、徳行、および敬神の心の若木surcolumを接ぎ木しておかなくては、理性を備え、知恵を持ち、徳に溢れる、敬虔な動物に育つことはできないのです。そこでこれから、人間は若木のうちに、このような果樹園に植えられなくてはならない、ということをお話ししなければなりません²⁸。

樹木における実りは、ここでは人間がやがて理性的で知恵をも備えた徳に溢れる人間になること、という喩えとして使用され、同時に樹木の生長は人間の肉体の成長にも重ねられる。

木の生長は、見ても見えません。どんなに鋭い目にもみえないのです。なぜなら、それは気付

²⁵ 『大教授学』 p.38, Didactica Magna, p.12.

²⁶ 『大教授学』 p.41, Didactica Magna, p.13.

²⁷ 『大教授学』 p.38, Didactica Magna, p.12.

²⁸ 『大教授学』 p.87-88, Didactica Magna, p.36.

かぬうちに次第にsensim sine sensu 成長するのですから。[…] 私たちの肉体の発育の仕方
も、これと同じです。発育するところは、見えません。見えるのは、発育した姿です²⁹。

「人間－樹木」という参照系は、「種子→樹木」という植物の展開モデルを、人間の内面の成熟や
肉体的な器官形成などの発育に、ともに適用し合いながら、技術としての教育の特徴を描き出すよ
うに見える。

では人間にとって望ましい教育とはどのように説明されるのか。ここで使用されるのはふたたび
「種子」のたとえである。

(5) 種子

人間を樹木にたとえるときの「種子」は、教育対象となる子どもや青少年を意味したが、では子
どもや青少年にどのようなことを行うのかという文脈のなかでの「種子」は、「徳」や「知恵」「知
識」を示す。以下の引用は、才能を畑にたとえて、そこに知恵と徳の種子を蒔く、というたとえで
ある。

畑は、地味が肥えていればいるほど、野茨や薊を生い茂らせてしまうものですが、同じように、
すぐれた才能ingeniumは、知恵と徳の種子を蒔いてもらわなければ、好奇心ばかりをそそる
妄想で覆われてしまいます³⁰。(下線部筆者)

ゆえに、「青少年の心に宿っているあの徳の種子seminaにうまく芽を開かせるために、清らかな
手で絶えず導き、手本を示して、これを誘い出すように心を配ること」、そして「知識の種子を宿
らせること」が必要であると説く。

こうした「種子」のたとえに説得力を与えると想定されているのは、「人が地に種子を播き、夜
昼眠り起きている間に、種子が芽を出し育ち、しかも人自身には、その育ち方quomodoがわから
ない」³¹というキリストの言葉である。自然物の成長が自発的に行われることと、技術によるもの
の成長の同型性を力説する箇所では、コメニウスは、述べる。

救世主がここで示しておりますのは次のことでもあります。すなわち、万物の中に万物を産みな
すのは神であり、人間に残されているのはただ、学識の種子doctorinarum seminaを誠実な魂
の中に宿らせることにすぎない。あとは常に、あらゆるものが自分から芽を出し、育ち、熟す
るのであって、人間にはその育ち方がわからないのである。ですから、青少年の教育にあたる
人々に課せられた任務は、学識の種子を上手に青少年の魂の中に播き、神のこの若木に心して

²⁹ 『大教授学』 p.149, Didactica Magna, p.69.

³⁰ 『大教授学』 p.85, Didactica Magna, p.36.

³¹ 『大教授学』 p.151, Didactica Magna, p.70.

水をやり、やがてこの木の梢に美事な成果と成長とが現れるようにする以外には、ないのであります³²。

「種子を播き、木を育てるにも、ある技術arsと熟練peritiaとが必要」であり、「未熟な植木職人の手で庭園に草木を植えれば、たいていは枯れるのがおち」であるがゆえに、「何を、どこで、いつ、どのような仕方で行なわなければならないか、また、してはいけないかを良く知り抜いている思慮深い職人の仕事」こそが教育の範例とされ³³、教育は「霊を栽培する、この技術」³⁴と称される。

3. 類比の方法について

ではなぜ、こうした喩えが、何らかの事柄を説得的に語りうるのだとコメニウスは考えたのか。その問いへの一つの回答は「類比Syncritica」という方法にあると考えられる。

(1) それ自体では十分に認識できないものが、その類似物から認識できるようになる？

『全集』第四巻には、『知恵の箕』³⁵という著作が含まれている。この著作は、『全集』を出版するにあたって、そこに収める諸作品についてコメニウス自身が、どの著作をいかなる意図をもって書いたのか、諸著作の不十分な部分や、今でも十分に評価できる部分などについて、自著紹介をしたものである。

コメニウスは、『大教授学』に関する部分で、小鳥が雛をかえすやりかたを技術になぞらえ、才能を形成する場合にも同じようにするべきだと論証する部分について出された批判をとりあげている。その批判によれば「類似のものは明瞭にしているものの、証明はしていないSimilia illustrant quidem, non autem probant」³⁶。

その批判への応答としてコメニウスは小論文を書いたが、焼失したという。その失われた論文の表題は「二つ目や三つ目の知恵…類比の方法Syncriticae methodiを有効に使用することについて」³⁷である。失われた論文の概要をコメニウスが述べるところによれば、「類比的な教授方法」とは「精神の目の前にある事柄が（分析Analyticaの場合のように）それ自体として解体されたり、（総合Syntheticaの場合のように）組み立てられたりするのではなく、同じ形態の何かある他の事柄と比

³² 『大教授学』 p.151. Didactica Magna, p.70.

³³ 『大教授学』 pp.151-152. Didactica Magna, pp.70-71.

³⁴ 『大教授学』 p.152. Didactica Magna, p.71.

³⁵ J.A. Comenius, Ventilabrum sapientiae, *Opera Didactica Omnia, pars IV*, Amsterdam 1657, 同書の写真復刻版 Praha, 1957, pp. 41-64. 訳出にあたっては、藤田輝夫訳私家版『知恵の箕』を参照させていただいた。なお、類比という観点については、クザーヌスがコメニウスに与えた影響について論じたパトチカの論文「『平安の中心』とクザーヌス」が興味深い。パトチカ前掲書、pp.109-126.

³⁶ Ventilabrum sapientiae, p.46.

³⁷ *ibid.*

較対照されてconfertur、その原因・部分・効果やその他の属性が一層明確に提示されるようになる場合のことである。すなわち、それ自体では十分に認識できないものが、その類似物から認識できるようになるということであるcognoscatur è suo simili³⁸という。

その方法は、昔の人々の知恵の本質であり、それは「ほぼ全体にわたって、自然や社会の事柄に目をとめて、それを象徴化するsymbolizarent、ということであった」³⁹とし、コメニウスは「さまざまな事柄のあの象徴Symbolizationesとは、(さほど洞察力のない人間の場合でも見られるような)純粋な比喩similitudines merasではなく、明らかに上位の自然本性naturae superioris (例えば「神」)の同一の足跡であり、相異なる素材に刻み込まれた標識signaculaである」⁴⁰というF.ベーコンの言葉を引く。

コメニウスにとって類比的なるものを支えるのは「似たような様子をしている事柄はどんなことでも同じ原型に基づいて作られているquaecunque similiter se habeant, ad eandem ideam factae」⁴¹という発想である。

例えば、私たちの肉体corporis nostriの身体器官の位置、用途、組み合わせや、そこから現れてくる協調という法則concordiae legesを知っている者は、どんな人間社会の団体humanae societatis corpori (すなわち 家族、政治、教会等々)の中にあっても協調の要件とされるすべての事柄、すなわち、さまざまな法というものをこの上なく容易に見通すことができるはずです。そのような類比syncrisiから「使徒パウロ」も「コリント人への第一の手紙第12章第12節」等々で、何らかのことを導き出したのだらうと思われま⁴²す。

さらに、類比という方法の有効性を保証するのは、この方法こそが、「聖書」のなかで神自身が用いた手法なのだ、ということにある。

たいていの場合、「神」がご自分の秘密について（ヨハネによる福音書第3章第12節と、コリント人への第一の手紙第13章第12節によれば、わたしたちがそのものだけでは把握できない事柄を、別のものを使って、鏡の中で明示されたものでもあるかのように、把握できるようにさせて下さっています。）ばかりでなく、私たちの義務についても、そのやり方を使って私たちに知らせて下さっている、という事態が出てきたのです。すなわち、あるときは被造物のなかにあるその御業を、またあるときには人間の行いを、またあるときには比喩Similitudinesや寓話parabolasでさえも、私たちに例として明示して下さいます。神の「聖書」はこれらの事柄にあまりにも満ち満ちていますから、類比の方法syncritica methodusがさまざまな秘密の鍵を解く鍵であると見なすことは正当でありましょう。しかも、確かに、「技術は自然を

³⁸ Ventilabrum sapientiae, p.46.

³⁹ *ibid.*

⁴⁰ *ibid.*

⁴¹ *op.cit.*, p.47.

⁴² *ibid.*

模倣するArtem imitari naturam」ということは周知のこと（そのことを私は『大教授学』第14章で明示しました。）なのに、それなのにどうして、「思慮」が自然や技術を模倣してはならないのでしょうか⁴³。

ゆえにコメニウスは、「類似のものは明瞭にしているが証明していないSimilia non probant sed illustrant、という論理学者のあの規定は、真理ではありませんし、あるいは少なくとも、そばに類似のものがさほど無い、ないしは断片的なものしかないという場合だけ真理なのです。」⁴⁴と述べる。

確かに、同じ原型に則って作られた類似のものは、証明以上のことをします。言い換えると、実証し、説き伏せ、反証し、抗弁を止めるように強いるのです。そのことは、ナタンによって唯一のたとえ話によって反証されたダビデの場合のように、また、長官に暴動を起こして、メネニウス・アグリッパの（「胃」に栄養を送ることを拒否した肉体の器官についてという）唯一の寓話によってなだめられて、直ちに謀反を取りやめたローマの平民の場合のように、明らかになりましょう。そのところから、永遠の知恵すなわちキリストにとっては、特にこのような類の論拠を用いて、ご自分に対して敢えて反駁をしようとする者にその口を閉じさせることが大いに好ましく思われたので、その方とか「使徒」たちの説教がすべて寓話に満たされることになったのです⁴⁵。

こうして、類比を批判されたコメニウスの結論は、「私は、『大教授学』のあの章（すなわち第14章から第20章）のところでは何一つ取り消しません」というものであった。「学校や、学校の担任教師は、苗木や小鳥や、スズメバチやクモ等々に目を止めなくてはなりませんし、それから、これらを模倣している庭園師や織物師や大工や画家やその他のどんな職匠であっても行っている、巧みに整理された行為にも、またそこから生じてくる巧みに構築された業にも目を止めなくてはなりません」⁴⁶。

(2) 自然と技術の類比

こうした類比という観点から優れた技術は評価される。コメニウスの評価尺度は、いかに自然を模しているか、である。ゆえに教育もまた一つの技術であるならば当然自然に基づくべきであり、そのために参考にすべきは、すでに自然を巧みに模している諸技術とされ⁴⁷、『全集』の扉絵のなかの〈庭園〉、〈工房〉、〈建築〉は「自然と諸技術との平行関係parallelismusに基づいて」なされた例

⁴³ Ventilabrum sapientiae, p.47.

⁴⁴ *ibid.*

⁴⁵ *ibid.*

⁴⁶ *ibid.*

⁴⁷ 『大教授学』 p.152, Didactia Magna p.72.

となる。

しかしながら、その基礎とは（第14章でみたとおり）、こうした技術の諸活動 *hae Artis operationes* を、自然の諸活動 *operationes Naturae* の諸規準 *normae* に、それこそ精密に合致させること以外にはありえないのですから、雛をかえす鳥を例 *exemplo* として、自然の道 *Naturae Viae* をたずねることにしたいと思います。その足跡を植木職人 *Arboratores*、画家 *Pictores*、建築職人 *Architecti* がまねて *imitentur*、成果を上げている実情を見れば、青少年の形成者たちもまた、これをまねしなければならない *imitandae* ということが、すぐ私たちにのみこめるでしょう⁴⁸。

コメニウスが説得力をもって、自然を模す技術として教育のあり方を語ろうとするとき、類比にもとづく二重の例示（「例えば～」(自然)、「…も同じように」(技術)）表現が使用される。自然（小鳥が雛をかえすとえ）→技術（庭園）にかかわる職人の部分）→教育、という参照系は、以下のように表される。

基礎 *FUNDAMENTUM* 第一 自然は適切な時期に留意する

例えば *Exempli gratia*。

種を繁殖させようとしている鳥は、[…] 太陽が万物に生命と活力を甦らせる春に始める。

園芸職人も同じように *Sic Hortulanus*、その時期でなければ *nisi suo tempore* なにもしないように、注意します。[…] 植えるのは春です。[…] そのあとの若木 *Arbusculas* の扱いについても、それぞれの作業に適した時期 *tempus cuius rei opportunum* つまり肥料をやる時期、枝を刈り込む時期、枝を下ろす時期等々をわきまえてはなりません。いやむしろ、樹木自身 *Arbor ipsa* が、芽を出し、花開き、緑に茂り、実を結ぶ等々の時期を正しく守っているのです。

[…中略]

そこで、結論を出しますと、I.人間の形成は、人生の春、いかえれば少年期に始めなくてはなりません⁴⁹。

⁴⁸ 『大教授学』 p.152, *Didactia Magna* p.72.

⁴⁹ 『大教授学』 p.154, *Didactia Magna* p.72.

むすびにかえて

本論では、『全集』の扉絵を導きの糸としながら、コメニウスの『大教授学』における「庭園」の喩えの特徴を考察した。

第一に、「庭園」に典型的なように、それがたとえとして十分に機能しうるのは複数の参照点（楽園、人間、樹木、若木、接ぎ木、種子等）が互いに互いを經由させながらのことであった。

第二に、こうした複数の参照点を經由する論立てが有効である、とコメニウスが考えることができたのは、類比という方法に信を置くからであり、この類比の効果を評価する大きな根拠の一つは、キリスト自身がとった手法でもある、という聖書解釈にあった。

少なくともコメニウスにおいては、その喩えが教育の例示として有効になるためには一定の参照系が存在し、その参照系を經由することが真理をなぞることに繋がる。その参照系を基礎づけるのは自然naturaと呼ばれるものであった。

今後の課題としては、本論で論じてきた基礎づけの始点となる自然naturaについての吟味が必要となるが、その前に、『全集』扉絵の〈庭園〉以外の諸技術がどのような喩えや例に結びつけられているのかを分析する必要がある。しかしこの課題は別稿に譲りたい。

*本稿は、科学研究費補助金 若手研究 (B)「価値移行期における世界の表象と伝達に関する思想史的研究－コメニウスの教育思想から」(課題番号 26780432) の研究成果の一部である。